

文・編集・発行 / 斎藤新緑 Tel <0776-82-1141> Fax <0776-82-2261>

【斎藤新緑事務所】〒913-0001 福井県坂井市三国町池上103-36

【e-mail】sinryoku@aurora.ocn.ne.jp

【ホームページ】http://www.ss.apdw.jp

ほつとらい

人に、まちに、いま、
元気の種をまこう。



VOL. 78

雪崩なだれのとき

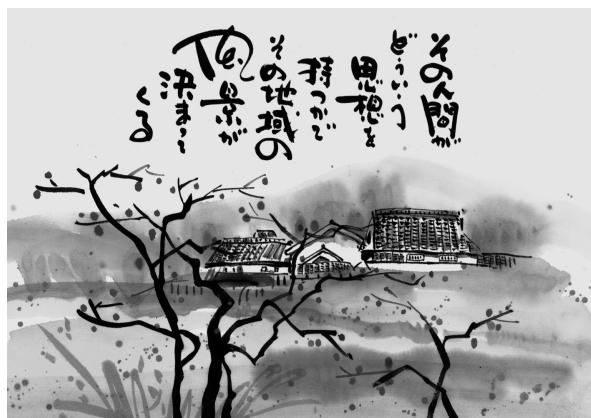
石垣りん

私は
その時が来たのだ、という
雪崩のおこるのは
武装を捨てた頃の
あの永世の誓いや心の平靜
世界の国々の権力や争いをそとにした
つつましい民族の冬ごもりは
色々な不自由があつても
また良いものであつた。

平和
永遠の平和
平和一色の銀世界
そうだ、平和という言葉が
この狭くなつた日本の国土に
粉雪のように舞い
どつさり降り積つていた。

人ひとは
その時が来たのだ、という
雪崩のおこるのは
武装を捨てた頃の
あの永世の誓いや心の平靜
世界の国々の権力や争いをそとにした
つつましい民族の冬ごもりは
色々な不自由があつても
また良いものであつた。

季節にはさからえないのだ、と。
雪はとうに降りやんでしまつた、
もうちいさく野心や、いつわりや
欲望の芽がかくされていて
すべてがそうなつてきたのだから
仕方がない」というひとつの中葉が
遠い嶺のあたりでころげ出すと
もう他の雪をさそつて
しかたがない、しかたがない
しかたがない、落ちてくる。



その時が来た、という
季節にはさからえないのだ、と。
雪はとうに降りやんでしまつた、
もうちいさく野心や、いつわりや
欲望の芽がかくされていて
すべてがそうなつてきたのだから
仕方がない」というひとつの中葉が
遠い嶺のあたりでころげ出すと
もう他の雪をさそつて
しかたがない、しかたがない
しかたがない、落ちてくる。

「今だけ、金だけ、自分だけ」
の危うい時代になつた。

政治は何やら、羊を守る柵さき
を突っぱらい、大企業の利益
を追い求めることばかりに夢
中で、世界中をブルドーザー^{ブルドーザー}
で押し流し、単一市場で弱肉
強食の強欲な無差別級・狼
ルールを適用するグローバル
化・TPP参加を信奉し、国家
主權を奪われるにハメになり
かねない。

アメリカ企業が支配するア
メリカ政府があつて、その配
下に日本の官僚がいて、その
下に国会があるような怖さが
ある。

アメリカは、ドル安とドル
高を繰り返すことで、国債な
どの借金を棒引きしながら新
たな借金ができる仕組みをつ
くってきた。ドル高=円安。

世界中の紙幣印刷の輪転機
はフル回転。リーマンショック
で失ったものを取り戻すた
め、さらに大きなバブルを仕

そこにはもう爆弾の炸裂も火の色もない
世界に覇を競う国に住むより
このほうが私の生きかたに合つている
と考えたりした。

そしてほつ、とする
ここにはもう爆弾の炸裂も火の色もない
世界に覇を競う国に住むより
このほうが私の生きかたに合つている
と考えたりした。

むかしの中国では、品評会
などでの入選順位を、一等・
二位とか、何かにつけてそん
な順位を競い合う野暮な国に
なつたのか。

そもそも、日本という国を
世界のランギングに位置づけ
することすら、情けない。
いつから、世界で一位とか
二位とか、何かにつけてそん
な順位を競い合う野暮な国に
なつたのか。

掛けてくるのだろうか。
日本が、世界一になると
言つても、オリンピックでは
あるまいに。
各々の国には「お国柄」が
あり、何を美しいというの
か、価値基準そのものが違
う。あまりに言葉が軽すぎは
しまいか、幼稚すぎはしまい
か。

別品の国へ

「いまこの国は景気さえよく
なれば、あとはどうなるうと、
ええじゃないか、ええじゃない
いか」の空気にあふれてい
る」と言つたのは、昨年亡く
なつたコラムニストの天野祐
吉氏。

その國のかたち=大好きな価
値を守ることを「保守」とい
うのではないか。
資産を持つ「別品」の國だ。
その國のかたち=大切な価
値を守ることを「保守」とい
うのではないか。
和敬清寂。「静かな眼、平和
な心、その外に何の宝が世に
あるう。」

逝きし世の面影



かつて、日本には、世界には類を見ない別格の江戸文明がありました。

渡辺京二著「逝きし世の面影」では、江戸末期から明治初期に来日した外国人識者の目

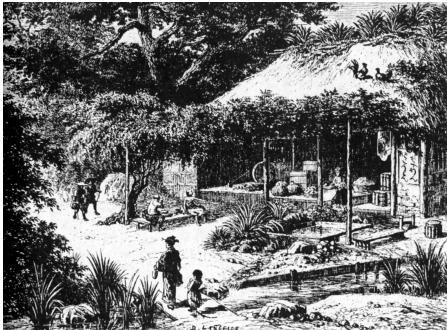
から、当時の日本人にとってはあたりまえすぎて記録にならなかつた庶民の生活の息づかいを浮き彫りにしています。

「幸福そうな笑顔、陽気でよ

く笑う、礼儀正しく親切、おおらかな性、子どもが大切にされている、動物との共生、仕事や生活そのものを楽しむ。こ

うしたことがある一部の地域や階層のみのことではなく、津々浦々、庶民の最下層にまで行き渡っていたことに目を丸くします。」

「いまや私がいとしさを覚えはじめている國よ。この進歩はほんとうにお前のための文明なのか。この国の人々の質権な習俗とともに、その飾りけのなさを私は賛美する。この國土のゆたかさを見、



江戸近郊の茶屋

いたるところに満ちている子供たちの嬉しい笑聲を聞き、そしてどこにも悲惨なものを見いだすことことができなかつた私は、おお、神よ、この幸運な情景がいま

や終わりを迎えるようとしており、西洋の人々が彼らの重大な惡徳をもちこもうとしているように思われてならない」。

「私の思うところヨーロッパのどの国民より高い教養を持つているこの平和な国民に、我々の教養や宗教が押しつけられねばならないのだ。私は痛恨の念を持つて、我々の侵略がこの國と国民にもたらす結果を思わずにはいられない。時がたてば、分かるだろう」。

▼ペリーの黒船来襲で鎖国から開国へ、西欧並みの近代化を始めたのが明治初年（1868年）、大東亜戦争が第二の開国（1945年）で敗北し、マッカーサー占領軍が日本を改造したの

が増えていたらしいではないかと言いつけるなら、そんなものは、人間の幸福を考えない「経済学」のようなもので、何の価値もありません。

しかし、今日、「金だけ」、「今だけ」、「自分で」行動原理のキーワードにするマネー

が、古臭い貧相な国」のように思つたとしても不思議ではない、ひたすら「古い日本」を捨て、西欧からぶれして行ったことでも想像に難くありません。

江戸時代を必要以上に称えられた「世界の手本」とも言えるので、「豊かさ」を問い合わせる人がいる今日、大きな示唆を与えてくれます。

「逝きし世」とは、近代化によって滅ぼされた江戸文化（18世紀初頭に確立し、19世紀を通じて存続したわれわれの祖先の生活様式総体）のこと。墓標として書き残さずにはいられなかつた作者の心情が伝わってきます。

儀なくされたのかは、ともかく、日本という国が遅れていて、西欧が進んでいるという視点から、開国の度に、日本という国が持つ固有の文化、価値基軸が否定され、壊されてきたよう思われます。

日本は確かに島国で、鎖国もし、大陸的な視野が狭いとか、西欧文明、近代技術に圧倒され、「遅れている」とか「古臭い貧相な国」のように思つたとしても不思議ではない、ひたすら「古い日本」を捨て、西欧からぶれして行ったことでも想像に難くありません。

萩原朔太郎は、昭和一五年（一九四〇年）に出版された『帰郷者』というエッセイ集の中でのようなことを述べている。

明治以来、日本の知識人は西洋を理想とし、西洋化することを近代日本の目標とみなしてきました。しかし、長年の夢から覚めて、あこがれの西洋が蜃氣楼に過ぎないことを知った知識人が日本の現実に戻つた時には、「昔あつたすべてのもの……すべての日本」の夢を想起するのです。そこで高い価値とは、崇高さや美意識や理想や友情や義や愛、いずれにしても、人々が自らの

なつかしい未来を描こう

なく消滅している。

すべては「無」に帰してしまった、というわけだ。

「戦後六〇年」の日本の精神もある意味ではこれと同様のものなのではなかろうか。



嘉永6(1853年)の下田港

リカ大企業を持ち込んだ当時の外国人識者が、この輝きに満ちた日本文明が死するであろうことを、明治初期に既に予見し惜しんでいたということがわかります。

西欧文明を持ち込んだ当ために自由貿易をさらに推進しようとするのが、第三の開国（TPP交渉参加表明）。

主体的に開国を選択したのか、開国を余儀なくされたのかは、ともかく、日本という国が遅れていて、西欧が進んでいるという視点から、開国の度に、日本とい

ういう論理は、単純明快ではあります。無論に、世界の経済的利益は最大化されれば、根拠のない不安定な時代となります。

型社会、持続可能な自己完結型の国を築いていたことは、世界の手本とも言えるもので、「豊かさ」を問いただすときが采ている今日、大きな示唆を与えてくれます。

大切なものは何か、生きるとどうである。「無」とはニヒリズムである。ニヒリズムとは、高い価値を自ら設定できず、自ら信じてもいないことを信じているように自らを欺くことである。

戦後日本の基礎は、アメリカ占領政策によって植えつけられた、自由、平等、民主、人権、ヒューマニズム、平和主義などを価値として受け入れた。私は、これらが間違っているというのではない。ただ、これらは、他者から与えられたものゆえに、自らの深い心地とも、日本文化の潜在力とも決して結びついてはない、といいたいのである。

しかし、今日、「金だけ」、「今だけ」、「自分で」行動原理のキーワードにするマネーと同時に、これらの価値は、決して無用ではないのだが、ニーチェ的にいえば、決して「高い価値」ではないのである。ここで高い価値とは、崇高さや美意識や理想や友情や義や愛、いずれにしても、人々が自らの

生命をかけても守ろうとする
価値のことである。

だが、戦後日本が平和主義と
人権主義を掲げたとき、その意味は、生命以上の価値を拒否する
といふものであった。とすれば、もはや、崇高さや美や理想
や義などという「高い価値」は
不要となる。

いつてみれば、行動の規範
を与える高い理想も倫理も存
在しなくなる。このニヒリズム
の中で登場するのは、ただ経
済的利益の自由気ままな追求とい
うだけではなく、そのことの意
味さえも措定できない、無目的
で「無・意味」な経済利益追求
でしかない。

貧困国が経済成長を追求し、
政情不安な国が社会安定を並め
るのは当然のことである。しか
しここまで豊かになつた国が、經
済活動の意味や
目的を自らに説明できない、とい
うのは悲しいことではないか。

そもそも、日本文化の中に
は、物質的幸福よりも、人々
の精神的なつながりや質素な
生活のもたらす安寧を重視す
るところがある。

生活の中に様々な形で美を持
ち込むことを好む。

資本にものをいわせた巨大な
ものよりも繊細で優美なものを
問題へと回帰することになるで
きである。



愛好する性癖があ
る。

巨大ビルよりも簡
素で素朴な建物への

愛好がある。

個人的利益追求よ
り他者への配慮と集
団への献身がある。

自己への固執より
も無私をよしとする精神があ
る。

激しい自己主張よりも控え目
な態度に価値をおく。

これらは、「日本のもの」の
美質であるが、これはまた、今
日のアメリカ型金融資本主義や
個人主義的競争社会、ITに席
巻された社会とはまつたく異質な
ものといわざるをえない。

そのことをわれわれ
は深く自覚する必要が
あるだろう。今日の
世界は、表面上はアメ
リカ型のグローバリズ
ムによつて支配されたかに見え
ているが、そのことの限界に誰
もが気づき始めている。この混
沌とした世界で、どの国も、そ
の国の「よつてたつゆえん」を
確認しようとするであろう。政
治にせよ経済にせよ、その基盤
になるものは精神的文化である
ほかない。要するに「価値」の
問題へと回帰することになるで
きである。

「よつてたつゆ
えん」とは、その
国民にとっての
精神的価値のこ
とであり、それ
は、即席に植え
つけられるもの
ではなく、まさ
しく歴史伝統の中で保持され育
成されてゆくほかないものだ。

日本の政治も経済も社会も、
「その国がよつてたつゆえん」
を見失っている。それを支える
精神文化を見失っている。しか
し、それが全く消失したわけで
はない。日本社会の再建は、日
本人がいまだ潜在的に保持して
いる、死生観、自然観、歴史観
といった日本の価値の根本を想
起することによつてのみ可能と
なるであろう。

(佐伯啓思、日本という価値)

「デフレ」、
「不景気」だか
ら、「景気回
復」、「アベノミ

クス」ということだが、かつて世界一の借金王と自称した小渕總理は公共事業を大盤振舞いしたし、「戦後最長の好景気」(二〇〇二～〇七年)という時期もあつたし、一円円安になればトヨタの営業利益は年間三五〇億円増加するといわれるよう、企業の利益は史上最高などとも聞く

景気対策しても、国の借金が増えるばかりで、景気が良くなる話は聞こえてこない。景気対策しても、国の借金が増えるばかりで、景気が良くなる話は聞こえてこない。

それは、国内の需要(内需)
の縮小にあり、その要因は、

それでも、従来型の大量生
産をするので、安物競争とな
り、コスト削減で、人件費は
抑制され、消費はさらに減少

▼少子高齢化、人口減少社会
とは
上図を見ると明らかのように、
人口が減少するといつて
も、各世代が一律に減少す
るのはなく、高齢者世代
は人口が増加し、一番の働き手
であり、最も消費する

戦後、「産めよ増やせよ」の
ベビーブーム「団塊の世代」
が、成長(加齢)するに従つて、車や家電など国内需要は
拡大し続け、その世代が定年
退職し、高齢化したことによつて、消費人口が減少し、
需要が減少した。

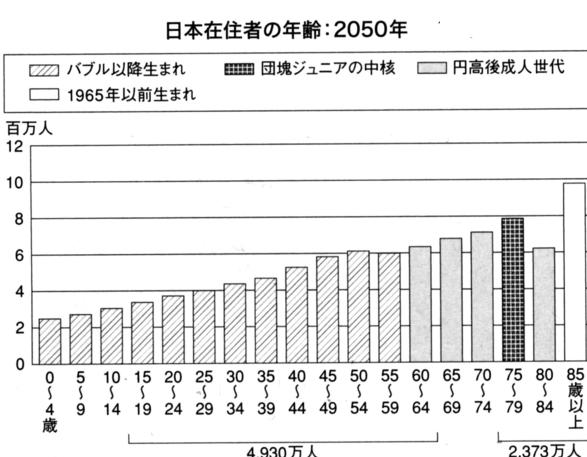
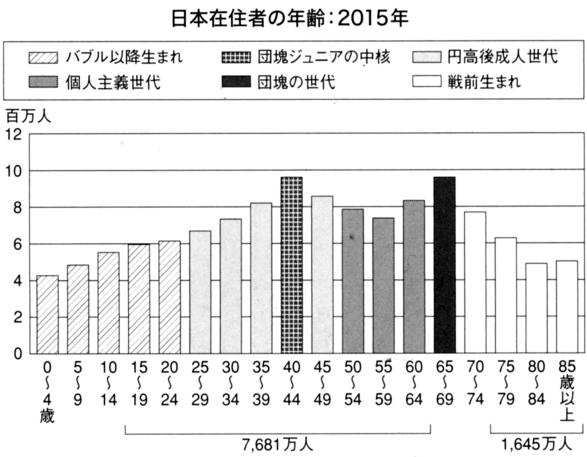
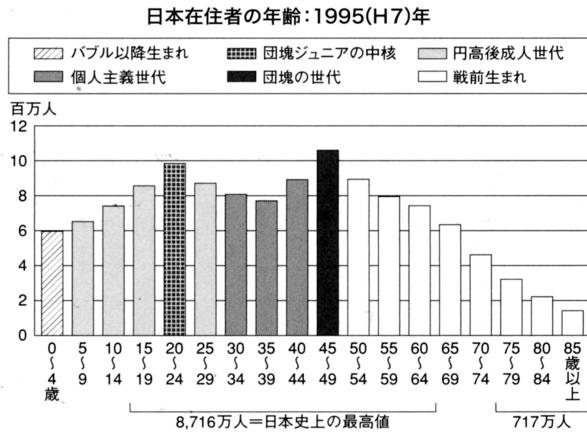
「生産年齢人口」というと
労働力というイメージの言葉
ですが、最も消費力のある世代で、「消費年齢人口」でもあります。

最も消費する現役世代の人口
減少によるものであると、藻
谷浩介氏は著書「デフレの正
体」で、極めて簡単に説明し
てみせます。

左上図は日本在住者の年齢構成の推移を見たものです。「生産年齢人口」とは、15～64歳までの「現役世代」人口です。年齢幅が広すぎるようになりますが統計上の数値です。

デフレの正体

左上図は
日本在住者
年齢構成の
推移を見た
ものです。
「生産年齢人口」とは、15～64歳までの「現役世代」人口です。年齢幅が広すぎるようになりますが統計



戦後、「産めよ増やせよ」のベビーブーム「団塊の世代」が、成長(加齢)するに従つて、車や家電など国内需要は拡大し続け、その世代が定年退職し、高齢化したことによつて、消費人口が減少し、需要が減少した。

それでも、従来型の大量生産をするので、安物競争となり、コスト削減で、人件費は抑制され、消費はさらに減少

▼少子高齢化、人口減少社会とは
上図を見ると明らかのように、
人口が減少するといつて
も、各世代が一律に減少す
るのはなく、高齢者世代
は人口が増加し、一番の働き手
であり、最も消費する

のではなく、高齢者世代
は人口が増加し、一番の働き手
であり、最も消費する
青壯年層が極端に減少して
いくことがわかります。
生産年齢人口(一十五六
四歳人口)が今後五〇年で
半減というペースで減少し
ている今の日本では、放つておいても働く人の数は
減っていくのであり、勤労者あたりの所得を今後五〇
年で二倍に引き上げること
ができる限り、内需は歯

止めなく縮小していく。

賃金二倍などとても無理と思うかもしれないが、現実の世界では、フランスやイタリアのように時給水準が日本より高い国が、日本から貿易黒字を稼いでいる。彼らの主要輸出品であるワイン、チーズ、パスタ、ハム、オリーブオイル、服飾工芸品などがいざれ

も、コストを価格転嫁できるだけのブランド力を持つ商品であり、現に日本でも高く売れているからだ。

従つて今世紀日本

の構造改革とは「賃上げで生きるビジネスモデルを確立する」ということで、「賃下げ」により足元の利益を確保すること

で自分の国内市場を年々自己破壊していく」ということではない。

日本全体の合計特殊出生率（女性一人が生涯に産む子どもの数）は、ここ数年少し回復してきたがそれでも一・四

を割り込んでおり、日本最低の東京都では一・一という水準だ。

この結果足元では、年間二六%減少のペースで一四歳以下人口が減っている。このまま行けば、今後六〇年程度で日本から子どもがいなくなってしまう状態だ。

これを冗談と笑うことはでき

ない。現に過去三五年の間に日本で毎年生まれる子供は四割も減つてしまつたという事実がある。

何かの抜本的な変化が起きて、これまで何十年も進行してきた少子化の流れが変わらない限り、子ゼモノの消滅とまではいかなくとも、さらなる激減は確実に起きる。

子どもだけではなくかなくとも、さらなる激減は確実に起きる。

生産年齢人口（一五～六四歳人口）も、一九九五年から二〇一〇年の一五年間にもう七

%も減っている。これがさらに今後五〇年間でほぼ半減となることも、もう誰にも止められない状況だ。

生産年齢人口（一五～六四歳人口）も、一九九五年から二〇一〇年の一五年間にもう七

%も減っている。これがさらに今後五〇年間でほぼ半減となることも、もう誰にも止められない状況だ。

少子化と高齢化を混同して「少子高齢化」と一緒に呼ぶ人がいるが、高齢化は少子化とはまた別の問題として近未来にたちはだかる。

日本が今経験している高齢化とは、一言でいえば高齢者の絶対数の増加、より正確には七五歳以上（後期高齢者）、あるいは八五歳以上（超後期高齢者）とも呼ぶべきか）の人口の急増のことだ。これを「高齢化率」の上昇のことだと思つていると事態が見えなくなる。

二〇四〇年の日本では、八五歳以上のお年寄りが一〇〇〇万人を超えるとの五歳刻みの

年齢階層よ

りも多くなり（ちなみに二〇一〇年現在は四

〇〇万人な

ので二・五

倍に増え

ることにな

る）、一番目には多いのが六五～六九歳というような状況となる。

その二〇年後の二〇六〇年に

なると、八五歳以上人口だけが一〇〇〇万人超で、四五～八四歳はどの五歳刻み年齢階層も五〇〇万～六〇〇万人と大差ない

状態になるという。

さらにその先の二〇七〇年と

もなると八五歳以上の絶対数も大きく減ること

が期待される

で、際限なく続

くかもしれない

少子化に比べれば、高齢化はかなりの時間は要

するが解決する

問題であるとも

言える。

こうした「人

口の波」を度外視して、従来通り、経済成長、発展、拡大をめざし、目先の景気対策のようなど

とをしていれば、破局への道を走り出すことになります。人口予測の話を持ち出すと、機械的に、日本の将来に対しても悲観的となりますが、現実を踏まえ、落ち着いて的確に対応することが必要です。

① 生産年齢人口が減るベースを少しでも弱めること。

② 生産年齢人口に該当する世代の個人所得の総額を維持し増やすこと。

③ （生産年齢人口十高齢者による）個人消費の総額を維持し増やすこと。

そして、成長社会から成熟社会へと移行していく価値基軸の転換が求められます。

定していたが、明治維新以降、あたかも線が直立“するほどに急激に人口増加が起こり、第二次大戦後に七千万人強で定していましたが、明治維新以降、あたかも線が直立“するほどに急激に人口増加が起こり、第二次大戦後に七千万人強で

あつた後も同様の急勾配の増加が続いたことがわかる。し

かし上記のようにそれが二〇〇四年にピークに達すると

第二次大戦後に七千万人強で

あつた後も同様の急勾配の増

加が続いたことがわかる。し

かし上記のようにそれが二〇〇四年にピークに達すると

第二次大戦後に七千万人強で

あつた後も同様の急勾配の増

加が続いたことがわかる。し

かし上記のようにそれが二〇〇四年にピークに達すると

第二次大戦後に七千万人強で

あつた後も同様の急勾配の増

人口減少社会という希望

き進んでいった。

そこでは戦前にに対する反省もあって、精神的な価値などといったものは

考えないほうがよいとされ、物質的な富の拡大あるいは功利的な損得のみに意識を集中させていたのである。

しかし、この図を少し角度を変えてみると、やや異なった様相が見えてくる。

▼ まずは、明治以降の私たち日本人が、いかに相当な無理をしてきたかという点である。

江戸時代までの日本人は、神道・仏教・儒教といった伝統的に

いたが、ペリーの黒船砲艦外交、欧米列強の軍事力を目

事などとともにそれなりに保つ

ていたが、ペリーの

や「疲労」が、様々な形の社会問題となつて現

れていると見るべきではないか。

かといって経済成長に代わる

価値や土台を見

出しきることもできず、何をよりも途方にくれているというの

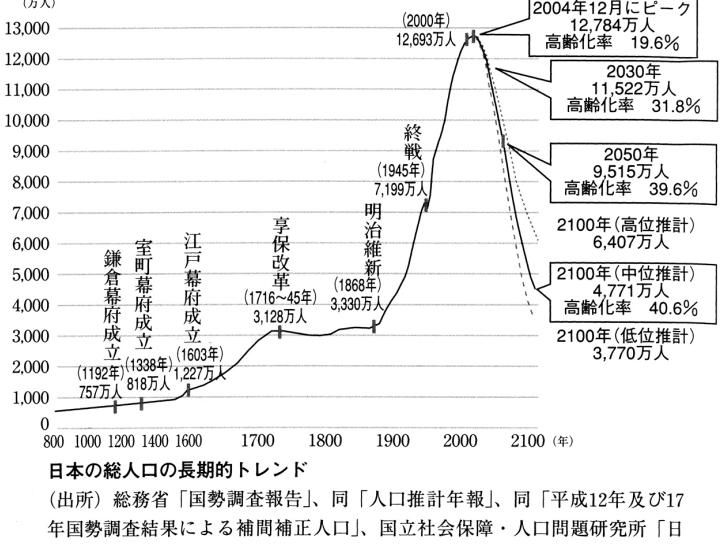
が現在の日本社会あるいは日本人ではないだろうか。

そして、以上のように考えて

いけば、むしろ人口減少社会への転換は、そうした矛盾の積み重ねから方向転換し、あるいは

上昇への強迫観念から脱出

し、本当に豊かで幸せを感じられる社会をつくっていく格好のチャンスあるいは入り口と考えられるのではないか。



(出所) 総務省「国勢調査報告」、同「人口推計年報」、同「平成12年及び17年国勢調査結果による補間正人口」、国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口(平成18年12月推計)」、国土庁「日本列島における人口分布の長期時系列分析」(1974年)をもとに、国土交通省国土計画局作成

る。こうした「人口の波」を度外視して、従来通り、経済成長、発展、拡大をめざし、目先の景気対策のようなど

に、それが多くの「大変な問題」を私たちに突きつけることは、確かにことであ

り、それに落下一する。

しかし第二次大戦に敗れ、それまで国家神道は否定される

とともに、それに代わって「経

済成長」ということが全ての目標あるいは「価値」となり、今度はひたすらに向かって突

られるのではないか。

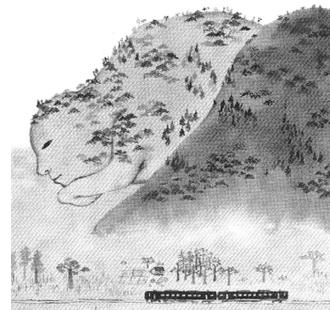
もう一つ、次のような視点もある。日本の人口は二〇一一年時点でお一億二千七八〇万人であるが、たとえばイギリス、フランス、イタリアの人口はいずれもほぼ6千万人で、日本の概ね半分に過ぎない。

この場合、イギリスとイタリアは日本より面積が小さいが、フランスは54万平方キロで日本の一・五倍に近い。またドイツは面積が日本とほほ同じだが、人口は約八千二〇〇万人である。

さて、日本は山林面積の割合が圧倒的に大きく、人が住める面積が大幅に限られていることである。

以上のような事実関係からすれば、少なくとも現在の日本の人口が、絶対に維持されるべき水準であると考える理由はどこにもないのではないか。

むしろ、先ほどのグラフにも示されるように日本の人口は急激に増えすぎたのであり（かつてのあり）、現在よりも人口が多少減ったほうが、過密のはずである。しかし、現在よりも人口が空間的・時間的・精神的な様々な面でプラスであると考えるほうが理にかなっている。



「少子化が進むと経済がダメになるからもつと出生率を上げるべきだ」とか「人口が減ると国力が下がるから出生率は上昇させなければならない」という声もありますが、「拡大、成長、限界に達し、あるいはその矛盾がきわまつた結果として、現在の低出生率があることを踏まえる必要があります。

そうした考え方や方向自体が限界に達し、あるいはその矛盾がきわまつた結果として、現在の低出生率があることを踏まえる必要があります。

生きるために必要なのは水と食料と燃料だ。お金はそれを手に入れるための手段の一つに過ぎない。

「われわれが生きていくのに必要なのは、お金だろうか。それとも水と食料と燃料だろうか。

間違えてはいけない。

二〇一一年三月二一日に発生した東日本大震災と原発災害と

マネー資本主義に浸っていると、何のためのマネーかを見失い、マネーそのものが目的化されていく。

ちようど、アメリカという国が「ものづくり」をやめて、お

金でお金を儲ける投資、金融ビジネス（カジノ資本主義）に手

を染めたように。

そして、そのアメリカは、「大企業と軍隊の植民地」（コーコーポラティズム）となつて、1%

富裕者の利益のために、どんど

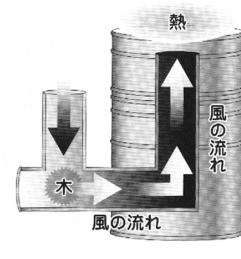
なつている何かは、何が原因で立ち現れたのか、と考えて行く

と、今日本人が享受している経

立ちはだかるのか、さらにその原因となるのか。

現代の不安・不満・不信は何か

ダウ・ン・シフト



「マネー資本主義」の対局に置く言葉として、「里山資本主義」があり、自然に囲まれ生きる資源の豊富な田舎・地方の強さ

今までにはGDPやお金が「豊かさ」の基準だったから

ところが繁栄すればするほど、「食料も資源も自給できない国の繁栄など、しよ

私たちが高度成長期の発想や価値観の枠組みの中で、あるいはその延長線上で物事を考える限り、人口減少社会は敗北あるいは「衰退」に向けた進行

「生き方」や実践が紹介されています。

「お金があれば何でも買える」と語った若手起業家は表舞台から消え、米国発のグローバル金融は、笑つちやうほどの弱点を世界中にさらした。農業と工業の区別もなく、市場をより大きくなり、より巨額のお金が流通さ

「さらに上へ」「さらに大きくなる」と目標を積み上げ、「努力」「成長」「拡大」に邁進することを常とする現代社会にあっては、「ダウ・ン」という言葉に悪いイメージを結びつける人も少なくないでしょう。しかし、「ダウ・ンシフト」とは、経済成長至上主義から降りることで人間が

本来有している幸せと安心の価値に戻り、足るを知る営みになり、分かち合う懐かしいよう



持ち、スケジュールのバランスをとり、もつとゆっくりとしたペースで生活し、子ども

もともと多くの時間を過ごすことを選んでいる。その多くは転職を経験して減暮らし方、経営のあり方を「ミニマム主義」と名づけたのは「日本一小さい農家」です。行つたり、ブランド品を買ったりする回数も減った。それで減速生活者には価値あるギア

チエンジだったという。

だ。そして私たちは忙しくな

り、家族と食卓を囲み、趣味を楽しむような日常を失い、生活の質は低下した。その憂さを晴らすかのような消費に、束の間忘れてきた。

「過度な消費主義から抜け出

間、我を忘れてきた。

今夏

舞鶴若狭自動車道全線開通

平成26年度はどうなる



何と言つても、平成26年度の目玉は、舞鶴若狭自動車道の全線開通でしょう。

これまで、福井県の高速道路は敦賀まで、美浜・美方・小浜・大飯・高浜への各市町へ行くのに県道に降りて走つてきましたが、ようやく今年、舞鶴若狭自動車道（舞若線）が全線開通することによ

り、福井県の高速道路がつながり、一体感のあるものとなります。また、これまで名神では宝飛騨・奥美濃・越前地方の

中部縦貫自動車道は、長野県松本市（中央自動車道長野線・松本）を起点に、飛騨・奥美濃・越前地方の

平寺東～上志比が平成28年度開通予定となっています。IC～大野IC間が開通し、今年度は、福井北～松岡間が開通、永平寺東～上志比が平成28年度開通予定となっています。

新幹線の金沢開業となります。計画では、福井県開業はその一〇年後（平成37年）となっています。

この10年間のブランクを埋めるため、工期短縮を働きかけると

ともに、観光誘客のアクションが重

要で、前倒しの予算計上が求められます。

福井国体開催は4年後の平成30年。

運動公園をはじめとする体育競技施設の充実をかかるとともに、各種競技力向上に向けて強化していく必要があります。

嶺南に自衛隊配備予算



「原発が集中

立地する嶺南地

域への自衛隊配

備に向け、国は

調査費100万

円を計上した。

嶺南各市町の首長から

の自

衛隊配備への要請があり、福

井県も国に対し、その要請を

行ってきました。

武田良太代議士は、福岡県

出身で、かつて、私が福井港

開港でお世話になつた恩人の

山崎拓先生から「名前は良太

だが、不良太なんだ」などと

笑いながら紹介を頂いた人

です。

國の予算で100万円とい

う少額はありえないような数

字ですが、これが実質的な予

算の第一歩となつて、ことが

動いていくということになる

と思うと、将来、自衛隊配備

がなつた場合、影にはこうし

た人の協力も頂いたことをど

こかで記しておかねばならな

いと思ったわけで、せめて、

私の新聞には掲載して、お礼

を申し上げたいと思つたわけ

です。

特に、何をお返しすること

もできませんが、将来、總理

大臣にでも立候補するよう

な時は、応援してあげてください。



武田副大臣と齊藤航空幕僚長

運動公園をはじめとする体育競技施設の充実をかかるとともに、各種競技力向上に向けて強化していく必要があります。

福井国体開催は4年後の平成30年。

運動公園をはじめとする体育競技施設の充実をかかるとともに、各種競技力向上に向けて強化していく必要があります。

新幹線の金沢開業となります。計画では、福井県開業はその一〇年後（平成37年）となっています。

この10年間のブランクを埋めるため、工期短縮を働きかけるとともに、観光誘客のアクションが重要で、前倒しの予算計上が求められます。

福井国体開催は4年後の平成30年。

運動公園をはじめとする体育競技施設の充実をかかるとともに、各種競技力向上に向けて強化していく必要があります。

「あいさつ



緑風会長 宮崎 茂和



新年のご挨拶

農園レストランNora 西辻一眞

皆様、あけましておめでとうございます。はじめまして、マイファーム代表、農園レストラン「Nora」の経営者、西辻一眞と申します。幼少期は三国町の運動公園の団地で育ち、18歳まで福井で暮らしておりました。

私が初めて斎藤さんにお会いした時は、「Nora」は、まだ古い農作業小屋で、事務所の家賃が高いので、その分、借金して、誰にでも何にでも使える市民開放型の交流の場をつくる計画を持っています。

完成後の「Nora」を見て、県産品を豊富に使った施設も竹林の庭も、センスの良さを感じさせ

るものの、「こんな良い場所を遊ばせておくならレストランに使わせて欲しい」と要望し、農業の六次産業化(生産、加工、販売)に取り組む決意をしました。

地域自給型循環型社会の実現をめざして、斎藤さん自らが作業服に身を包み、実践して考へている姿を見て感動しましたし、自己保身に固まつた政治家は沢山見てきましたが、自己犠牲も厭わない「目的遂行型」とでもいべき、実践力のある政治家がいることがとても嬉しく惚れ込みました。



皆様は清らかな心、しかし旺盛な行動力、夢をかけた新しい年を夫々にお迎えになられたことと思います。まずもつて今日を生きる喜びを心から祝福させて頂きたいと思います。

山紫水明、空気はおいしく、農産物も海産物も日本一。そのコミュニティーの中で私達が絆を分かち合ひ、お互いを思いやり、生きています。

しかしうれないで下さい。このような素晴らしい坂井市にはもう一つ誇れるものがあります。それは私達の現在と未来への希望と期待としっかりと受け止め、県会の第一人者として活躍されている斎藤新緑先生です。

私はこの紙面で皆様には初めて挨拶させていただきました。前会長であつた茂夫が昨年9月に逝去、新緑先生の強いご希望があり、諸般の事情から今年からその重職を継承させて頂くことになりました。

坂井市は勿論ですが、今や福井県は景気の復調をはじめ、重要な問題を沢山抱えています。新緑先生の蓄積された経験を十分に生かしていただき、ご活躍を皆様と共に期待し、お願いし、応援したいと思います。



郷に来て頑張ってください」というご要請も頂きました。

「福井県三国町出身なのに、よそ

の都道府県だけでなく、生まれ故郷、福井県に来て頑張ってください」というご要請も頂きました。

「西辻君のおかげで、私が農業補助金でもらって、農家レストランを建て、経営していると思われているんだ」と斎藤さんは笑つて言われるのですが、私が全国を飛び回っているので、諸手続きをはじめ、忙しい時は、奥さんにまでお手伝いをしてもらひ、恐らく大変なご迷惑がかかるので、お掛けしたので、お手伝いをし

が楽しい農業です。

斎藤先生のますますのご活躍をお祈りします。

「Nora」もごひいきにお願いします。



張ってください」というご要請も頂きました。

「Nora」は農が良い野菜、農

いという意思もありましたし、こんな熱い情熱的な県会議員がいるなら、福井でもやりたいと思いました。

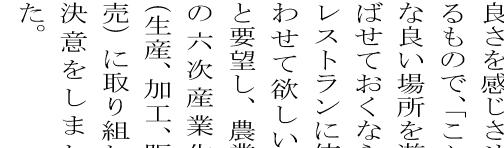
斎藤さんが思っている「都市と農村の交流」や「自由なたまり場」という面では、多少レストランで拘束するものとなりますが、いつでも貸切を含め、法事であろうが結婚式であろうが、いつでもお気軽にご利用いただきたいと思いますし、その意思を尊重して、地域農業、農山漁村の活性化をめざし、農産物の現金買取など、お役に立てます。



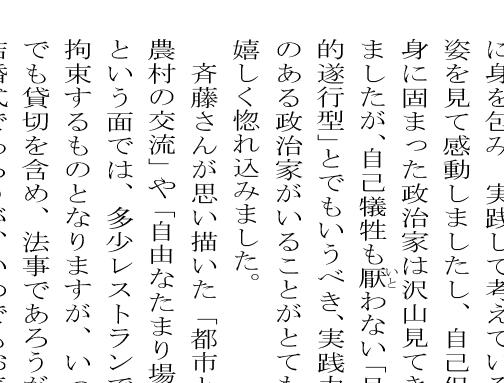
生産者との農産物現金買取交渉風景



生産者との農産物現金買取交渉風景



生産者との農産物現金買取交渉風景



生産者との農産物現金買取交渉風景

ヤツトン節

作詞・作曲不詳

お酒呑むな酒呑むなの御意見なれど ヨイヨイ
あなたも酒呑みの身になつてみやしやんせ ヨイヨイ
ちつとやそとの御意見なんぞで
酒止められましようか
トコ ねえさん 酒もつてこい
山からけつころがしたる松の木丸太でも ヨイヨイ
世に出来や不細工不ざまなお多福おかめでも ダガネ
妻と名がつきやまんざら憎くない ヨイヨイ
ほんとに腹が立つ
トコトンのヤツトンントン

ちよいと聞いた隣座敷のひそひそ話 ヨイヨイ
たしかにお客はいつもの恋仇 ダガネ
とんびに油揚さらわれた ヨイヨイ
こちらはおきざり ほんとに腹が立つ
トコ ねえさん 勘定して来い

汽車が止まる車掌が戸あけるお客様が降りる ヨイヨイ
てんでに荷物を肩にかけ ダガネ
赤い鼻緒のつつかれ草履 ヨイヨイ
ビールに正宗 シトロン
マッチに 卷煙草
寿司弁当にお茶お茶
三日前の古新聞読む気があつたら買つとくれ
トコトンのヤツトンントン



太郎を眠らせ、太郎の屋根
に雪ふりつむ。
次郎を眠らせ、次郎の屋
根に雪ふりつむ。

三好達治に「雪」という、
わずか二行の短詩がある。
そこで先生は生徒に質問
する。

太郎と次郎は兄弟なの
か？ 太郎と次郎は別々の家
に住んでいたのか？ 住んで
いる場所は都会か田舎か？
眠させていたのは誰か？ 二
人以外に三郎や四郎の家も
あるのか？ どんな光景を描
いたのか？

「好きな季節は冬」。

農作業から解放されて、母
にとつては、心身ともに休
まる一番の季節だったのだ
ろう。だからといって、コタ
ツに入つてテレビを見てい
たのではなく、藁仕事や芦
原の旅館の浴衣を縫う針仕
事など働き続き通しだが、
母にとつては、その程度の
冬仕事は「楽しみ」だったよ
うに思われる。

屋根に雪がふり
つむと思ひ出す短
詩「雪」、冬ごもり
のぬくもり。

「好きな季節は
冬」。母を想う切な
さと幸福感をもた
ります。

新緑の気ままにトクク

東風。私が馬で思い出したこと、
うちの姉ちゃん馬よりすごい、
村の若い衆を皆乗せる…ツー
ツーレロレロ…」

馬齢を重ねて 58年、馬脚を
露す。

▼一日一生

「たとえ長生きして百年生
きたとしても、心に静けさと
いうものがないならば、静か
な思いをもつて、たつた一日
を送った人にも及ばない、と
い出します。

ドでシュミーズ脱いで…と爺
ちゃんから芸者ワルツの替え歌
が出来ないほど笑つたことを思
い出す。

の歌ぐらいで、大人若い衆の
歌う、それこそ、この世で初め
て聞くような替え歌は、抱腹

が出来た時は、ひつくり返つて息
を漏らす。

▼新年会シーズンである。

私の宴会初デビューは、

村の若講中（若衆主催の寺

の報恩講）で、元服が済んだ
15歳のとき。

開催場所と

なつた家を「宿」

として、報恩講

を終えたあと、
年の順に並んだ

高お膳で、酒盛

りが始まる。

子若い衆は酒の燶が役目。

「熱い」とか「ぬるい」とか

叱られて、ヤカンに指を入

れて適温を探るうちに酔つ

払つてしまふ。

数え年三〇歳までが現役

で、三一歳がお客様（来賓）。

「お客様の酒を切らすな」

と言われ、上座に張り付いて

酌をする。下座から順に上座

に注ぎにまわる。

上座のお客さんは、それ

らを全部受けた後、やおら

下座に酒を注ぎに一回り。

席に戻ると、手拍子を叩

いて男同士の歌が始まると

ある家の建前の晩、手拍

る挨拶もよく聞かされて馬耳

す日に。

人の名前が出てこなくて、
携帯電話の「ア」から順番に探

す。

年賀状には、こんな言葉を

決意表明的に書けるのではあ
るが、単なる「願望」に過ぎ

ねが意義ある生涯というも
のを創りだしてくれるのです。

一日一生の思いで、心して
生きてみたいと思います。」

東風。私が馬で思い出したこと、
うちの姉ちゃん馬よりすごい、
村の若い衆を皆乗せる…ツー
ツーレロレロ…」

馬齢を重ねて 58年、馬脚を
露す。

▼一日一生

「たとえ長生きして百年生
きたとしても、心に静けさと
いうものがないならば、静か
な思いをもつて、たつた一日
を送った人にも及ばない、と
い出します。

ドでシュミーズ脱いで…と爺
ちゃんから芸者ワルツの替え歌
が出来ないほど笑つたことを思
い出す。

の歌ぐらいで、大人若い衆の
歌う、それこそ、この世で初め
て聞くような替え歌は、抱腹

が出来た時は、ひつくり返つて息
を漏らす。

▼新年会シーズンである。

私の宴会初デビューは、

村の若講中（若衆主催の寺

の報恩講）で、元服が済んだ
15歳のとき。

開催場所と

なつた家を「宿」

として、報恩講

を終えたあと、
年の順に並んだ

高お膳で、酒盛

りが始まる。

子若い衆は酒の燶が役目。

「熱い」とか「ぬるい」とか

叱られて、ヤカンに指を入

れて適温を探るうちに酔つ

払つてしまふ。

数え年三〇歳までが現役

で、三一歳がお客様（来賓）。

「お客様の酒を切らすな」

と言われ、上座に張り付いて

酌をする。下座から順に上座

に注ぎにまわる。

ある家の建前の晩、手拍

る挨拶もよく聞かされて馬耳

す日に。